

音楽はなぜ存在するか

金澤 正剛

音楽はなぜ存在するのでしょうか？ 考えてみれば音楽が存在しなくとも、人間は生きていくことは出来るようにも思われます。その点で音楽は、人間が生きていくために必要であるとされる「衣食住」とは違うと言えるでしょう。しかしさらに考えてみると、人間が生きていくために絶対必要なのは「食」だけで、「衣」と「住」は無くても何とかなりそうです。大昔の人間の先祖や、今日でも暖かい地域に住む原住民の中には裸で生活をしている人も居るわけですし、家が無くても橋の下に住んでいる人たちや、野宿をするのはあたり前というような人も居るわけです。だがそれでは山の猿や野良猫などと同じで、人間らしい生活とは言えません。人間が人間らしく生きていくためには、「衣」と「住」も必要であるし、さらにその他にも必要なものがあるように思われます。そしてその中には音楽も含まれるのではないのでしょうか。世界は広いと言っても、音楽を持たない民族はほとんど見当りません。もっともそれには、音楽とは何であるかという定義の問題がありますが。

有名な哲学者の言葉に「人間は考える葦である」という名言があります。しかし考えるばかりではなく、さらに自己表現をする、というところが重要です。しかも地球上にこれだけ多くの人が居るのに、全く同じことを考え、自己表現をする人は他には居ません。自己表現というと必然的にそれを受け取る相手が必要であるようにも思われますが、中には誰も居なくても自己表現している人も居ます。例えば公園などで、誰も居ないのに1人で踊っている人を見かけたことはありませんか。また考えて自己表現をす

るのは人間だけではなく、犬や猿もすることはするが、それには限度があるところが違います。例えば出合がしらに野良猫と目が合った時など、猫は一瞬たじろぐものの、次の瞬間自分の身に危険が迫っているかどうかを考える。そして危ないと感じたら一目散に逃げるが、そうでなければ再びその場で昼寝に戻る。またお腹の空いた飼い犬は、それを示すためにいろいろな芸をやって餌をねだる。しかし彼らの自己表現はそのあたりが限度で、一方人間には無限の可能性が与えられているのです。

ひと口に「自己表現」と言っても、それには多種多様なものがあります。人間にとって一番基本的な自己表現の手段には言葉があります。しかしもし口が利けなかったら、必然的に別の自己表現の手段を考えるのが人間です。例えば体の動きを媒介として表現することから、パントマイムや舞踊が生まれる。視覚を媒介とすれば、色や形を素材として美術的表現を行う。聴覚を媒介とすれば、素材は音であり、その結果音楽が生まれる。その際重要なのは、人間には美意識というものがあるということです。同じ表現をするならば、なるべく美しく表現する。言葉を用いて美しく表現すれば文学となる。美しい表現を心がけて体の動きから舞踊や演劇が、色や形を使って絵画や彫刻が、音を用いて音楽が生み出される。これらはいずれも芸術という分野に属する。つまり同じ芸術でも表現手段の違いによって、文学、美術、音楽などに分かれるのです。

ここで話を音楽に限って進めることとしましょう。音楽を定義すれば、「音を手段とした美的表現」と言うことが出来るでしょう。ところが何が美しいかは人によって異なるところに問題があり、また面白いのです。例えば20世紀のいわゆる前衛音楽の中には、多くの人にとっては美しいとは考えられない例が少なくありません。同じ声楽でも、声の出し方によって美しいかどうかは人によって違います。昭和の初めに当時ソプラノの名歌手として知られたガッリクルチが日本に来たことがありました。私の祖母がその超人的なコロラチュアの絶唱を聴いて、「まあ可哀想に、この子の咽喉はどどこおかしいよ」と言ったという話を聞かされたことがあります。一

方多くの外国人にとって義太夫の語りは美しいとは思われないようです。また今では癒しの歌として人気さえあるグレゴリオ聖歌についても、「あれは音楽ではなく、お祈りに過ぎない」と言った音楽学者がかつて居たことも思い出されます。つまり音による表現も、どこから音楽になるかという境界線が問題です。

もう既に40年ほど前の話になりますが、大阪で万国博覧会が開かれた時、ドイツ館で行われたシュトックハウゼンの演奏に協力した高野昌昭という人が居ました。音楽家というよりはむしろ音響技術家として有名な方ですが、ある雨の日に自宅でぼんやり過ごしていた時に、屋根から落ちる水の音に気がついた。しかもその音を美しいと感じ、それを録音してLP盤を作ってしまった。しかも視覚的にもそのしずくを表現してみたいと思い、LP盤を透明な素材で作り、廻すと盤上をしずくが動いているように見えるように工夫した。さらにLPのカバーもしずくに見えるような皺のある白い紙で作り、それに灰色のインクで「しずくたち」とだけ書いた。それを果たして聴覚と視覚に訴えた総合芸術と考えるかどうか、自然現象を録音した単なる記録とするか、1人の人間が美しいと感じて、音を選んで録音したのだから音楽と見なすかどうか。

これと似た例に、わが国を代表する作曲家武満徹が発表した《水の曲》という作品があります。いろいろな水の音をテープに録音して、それを早送りしたり引き伸ばしたり、切り取ってつなぎ合わせたりした結果完成した作品で、いわゆるミュージック・コンクレートという前衛音楽の例なのですが、演奏はテープをまわすだけで演奏者は要らない。それでも音楽会で「演奏された」ことはある。この作品は一般にも音楽作品と認められているが、高野さんの作品に比べてそれほど違うようにも思われない。それなのに当時LP店に行ってみたところ、武満の曲は現代音楽の、高野さんの作品は「効果音録音」のコーナーにあったことを思い出します。

ところで武満はその後、《水の曲》の改訂版を発表した。その際テープ音だけでなく、それにフルート2本と打楽器を加えて室内楽としたのです。

すなわち武満は、ひとつの曲を完成させても、それをそのまま置いておくことはしない。さらに変化を与えることによって新たな表現を生み出す。19世紀以後楽譜重視の傾向が強くなって、一旦完成して出版してしまうとそれはその作品の最終版となり、変えることはとんでもないという風潮が続いた。しかし最近同じものからまた別のものを生み出すという作曲家たちが現れるようになったが、実は18世紀以前もその通りだったのです。おとといのことですが、ギロックさんというオルガニストがICUに来られました。現代フランスを代表する作曲家メシアンの曲を得意としている方ですが、個人的にも親しかったメシアンが、一度完成した作品を書き直すのが常であったという話をしてくれました。しかも既に出版された楽譜にまで手を入れ、テンポを変えたり、クレッシェンドやディクレッシェンドを書き加えたり消したりした。つまり常に新しい表現を求めているわけで、それでこそ人間なのです。自分の表現がある時点で完成されたとしても、そのまま満足するわけではない。より良い表現を求めるところに、より優れた芸術家の本領があるとも言えるのです。

ここでヨーロッパにおける音楽の表現のルーツを探ってみたいと思います。そのルーツとはすなわちキリスト教の聖歌であり、そのかぎを握っているのが『ムジカ (音楽)』の著者でもあるアウグスティヌスです。彼は「詩篇を朗唱することが大切である」と言っているが、それはキリスト教がユダヤ教から受け継いだ習慣でもあり、まさにキリスト教音楽の原点でもある。彼はまた詩篇を、「はっきりと声をあげて朗唱すること」とも言っているが、そうすると自然に節がつくことになる。そのようにして生まれたのがいわゆるグレゴリオ聖歌であり、正式にはローマ聖歌として知られるものです。それはラテン語で歌われるのがひとつの特徴であるが、それは古代や中世のヨーロッパにおいてはラテン語が国際語であったことに他なりません。

それでは具体的な例として詩篇第109篇 (日本語の聖書では第110篇) を取り上げてみましょう。この詩篇は日曜日や重要な祝日の晩課で最初に歌

われるもので、それだけに最もよく歌われる詩篇としても知られます。その節付けは8通りありますが、いずれも各節の最初と終わりに旋律の動きが少しは見られるものの、基本的には同じ高さの音を繰り返しながら朗唱するのです。(実演) これは音楽でしょうか? いや、ただ聖句を唱えているだけだと言う人も居るでしょう。しかし知らない者がそれを聴いて美しいと感じれば、音楽と考えても良いのではないのでしょうか。ヨーロッパの音楽はこのような聖歌をルーツとして発達し、中にはその元の形を残している例もあるのです。次の例は17世紀の英国国教会のために作曲された詩篇ですが、主旋律にハーモニーが付いていることとオルガンの伴奏が加わることを除けば、基本的には聖歌の朗唱とあまり変わってはいません。(実例)

朗唱といっても実際にははっきりした節が付く例を、アウグスティヌス以前にさかのぼって聴いてみましょう。まず詩篇の朗唱はもともとユダヤ教の慣習なので、ユダヤ教における詩篇第42篇の朗唱を聴いてみましょう。これは「鹿が谷間で泉を求めるように、わが魂も神を求める」という言葉で始まる有名な詩篇です。(実例) お聴きの通り、ここでも朗唱で声を挙げることにより、はっきりと節が生じています。次にシリア正教会でイエス様の母国語であるアラム語でルカによる福音書第2章からの一節を朗唱している例を聴きましょう。(実例) ここでもちゃんと節が付いていて、司祭と助祭が交互に歌っています。次はコプト教会におけるアラビア語でヨハネによる福音書第1章を朗唱している例です。(実例) ここでは司祭が一節朗唱するごとにそれに会衆が応え、それが繰り返し句のような役割を果たして音楽的な形式さえ生じています。コプト教会では礼拝の中で打楽器などを使ってにぎやかに囃したり、踊ったりもする。そしてそこで使われている楽器の中には旧約聖書に記された楽器と一致すると論じる学者も居ます。(実例)

次にプロテスタントの場合を考えてみましょう。ただしプロテスタント運動の初期の指導者たちの音楽に対する態度はかなり異なっていて、中で

も一番音楽的才能に恵まれていたとも言われるツヴィングリは、かえってその危険性を恐れたためか、音楽を完全に礼拝から排除してしまいました。一方カルヴァンは初心に戻る事が大切と、詩篇をフランス語に訳して節を付け、それを無伴奏で会衆一同で斉唱しました。それに対してルターはあらゆる手段で神を賛美すべきであるとして、オルガンを用い、聖歌隊も残したのですが、一番大切なのは会衆全体で歌うことであるとして、賛美歌のルーツであるコラルを作りしました。そして1524年には最初のコラル集を出版していますが、それらのコラルは新たに作曲されたものばかりでなく、グレゴリオ聖歌や民謡を書き直したものも少なくないのです。中には聖歌が民謡化してライゼという宗教的流行歌となり、それをルターがコラルに書き直したという面白い例があるので、見てみることにしましょう。

元になった聖歌は《過越しの生贄を賛美せよ *Victimae paschali laudes*》という復活祭の聖歌です。(譜例1) それが中世に《キリストはよみがえられた *Christ ist erstanden*》というライゼとなり、それをルターが《キリストは死の絆につきたまい *Christ lag in Todesbanden*》というコラルに書きかえて1524年の曲集に入れました。(譜例2) その旋律の上には、「《キリストはよみがえられた》を改良した歌」と記されています。この最初の段階では、コラルは教会旋法にもとづき、言葉のアクセントを生かして自由な拍子で歌われていたのですが、その後次第に形が少しずつ変わって、18世紀の初頭までには4拍子による二短調の旋律に変容してしまっていました。その旋律にもとづいてバッハが名曲カンタータ第4番を作曲したのです。そのカンタータの最後で歌われるコラルの旋律が、今日では『讚美歌集第2編』の賛美歌第100番として歌われています。(譜例3)

最後に現代における聖歌の影響の例を2つ挙げておきましょう。ひとつは20世紀を代表するフランスの作曲家メシアン《われらの主キリストの変容》からその冒頭の部分で、マタイによる福音書第17章の言葉が朗唱されます。(実例) この音楽は確かに現代的表現によってはいるものの、聖

譜例 1 *Liber usualis* (Tournai, 1956), p.780.

seq.
1.

Ictinae paschali laudes • immolent Christi-áni.
 Agnus redémit óves : Christi innocens Pátri reconci-
 li-ávit peccatóres. Mors et ví-ta dú-élo confixére mirán-
 do : dux vítae mórtu-us, régnat vívus. Dic nóbis Mari- a,
 quid vídisti in ví-a? Sepúlcrum Christi vivéntis, et gló-
 ri-am vídi resurgéntis : Angé-licos téstes, sudá-ri-um, et
 véstes. Surrexit Christus spes mé-a : praecedet sú-os in Ga-
 liliáe-am. Scimus Christum surrexisse a mórtu-is vere :
 tu nóbis, victor Rex, mi-se-ré-re. Amen. Alle-lú-ia.

譜例 2 Johann Walter ed., *Geystliches gesangk Buchleyn*
(Wittenberg, 1524).

wohnt die hert vmb weyde/ff/die alles volck
 erhalten. In récher ban yu wallen.
 Es dancké Got vnd lobé dich/ das volck in
 gúten thátten. Das landt bringt frucht vñ
 bessert sich, dein reodt ist vñ geratzen. Das
 seign vater vñ ber son/vns segé got der hertlig
 gútt. Dem alle weilt die ehre thun/sur ym sich
 fürche allermeyst. Tu sprache vñ betzen zúmi-
 Das iped Christi ist erstande Gebeffert.
 Christi lag in todtes banden/sur vnser sunb
 gegeben. Der ist wider er stande/ vñ hat vns
 bracht das leben. Des wir sollenn frölich sein.
 Got loben vnd danckbar sein vñ singen/ Alk.
 Dem todt nemand ymigen kund/ bey al em
 menschen kinden. Das mache alles vnser sunb
 zeyn vñnschuldé war yu sinden. Darvon kam
 der todt so bald/vñ nam vber vns gewalt/

譜例 3 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌・讃美歌第二編』
(日本基督教団出版局, 1993).

100

主は死につながれ

Christ lag in Todesbanden
詞: Martin Luther, 1524
(Wipo 原作 Victimae Paschali にもとづく)

CHRIST LAG IN TODESBANDEN
曲: Victimae Paschali にもとづく 宗教院部
(編曲) Johann Sebastian Bach, 1685-1750

♩=72 主は死につながれわがつみをとーき
主はよみがえりていのちをたまーう

よろこべーみたみわが主に感一謝せよた

たえよハレルヤハーレールヤ

1

1 コリント 5:7

書朗読の部分はシリア正教会やコプト教会における聖書朗読と共通した性格を持っているようにも思われます。次にケルヴィン・カーンというポピュラー音楽のピアニストが即興風に演奏している例を聴いてみましょう。(実例) ただ聴いただけではサロンカバーで弾いているだけのようには思えますが、よく聴いてみるとひとつの旋律を繰り返し弾いているのに気付きます。実はその旋律は、《舌よ歌え Pange lingua》という有名なグレゴリオ聖歌の旋律に他ならないのです。(譜例 4)

こうなるとクラシックもポピュラーも同じことで、音を媒介とした人間の表現であることには変わりありません。しかもそこには限りない発展の可能性がある。人間が音を用いて表現するのはごく自然なことであり、人間にとって音楽は不可欠なものであることが分かるのではないのでしょうか。

譜例4 *Liber usualis*, pp.957-959.

Hymn.
3.

P Ange língua glo-ri-ó-si Córpo-ris mysté-ri-um,
 Sanguínisque pre-ti-ó-si, Quem in mún-di pré-ti-um Frú-
 ctus vén-tris gene-ró-si Rex effú-dit génti-um. 2. Nóbis dá-
 tus, nóbis ná-tus Ex intácta Vírgine, Et in mún-do

質疑応答

森本 お話を伺っていて、自分がクラスでやっていることとつながっていると思いました。われわれが知らない美しい音楽がこの世界ですっと鳴り続けている。それは誰の耳にも届かない。音楽は消えてしまう。しかし今口ずさんだメロディーを美しいと思ったら、人はそれを固定したいと思う。楽譜だとか、レコーディングだとか。固定されるとさらなる発展 (evolve) は一旦止まる。固定していくことと、なお生き続けて発展していくこと。固定することの罪悪感がある。

金澤 ただ、固定するというのもあくまでも基本的なものをそこにとどめるに過ぎないのであって、それを音に復元するとなると誰かがそれを再生しなくてはならない。例えばひとつのピアノ曲を誰かが弾く。その楽譜は

固定されているが、A君が弾いたものとBさんが弾いたものとは完全には同じとはならない。それが本来の形だと思う。楽譜というものには限界がある。作曲家が残したものであるが、それを実際に復元する時、もう一度音に戻す時、必ずしも同じにはならないし、同じにする必要もない。

丁度今武蔵野市民会館で国際オルガン・コンクールがあって、今もそれが続いている筈だが、同じ曲を演奏しても、同じ楽譜から弾いているのにひとりひとりが全然違う。それがあべき姿なのです。先ほど挙げた例でも、メシアンは自分の曲をずっと変え続けていた。作曲家自身でもそうなのです。作曲家が残した原型をそっくりそのままコピーするというのでは意味が無い。それだったら録音したものを繰り返し聴けば良い。武満徹が《水の曲》を一応固定化したものの、そこにとどめなかったのは何故か。その曲の改訂版の楽譜を見てはいないのははっきりとは言えないが、演奏家の自由に残した部分があったのではないか。つまり、同じ演奏は二度とされないところに意味があるのではなかろうか。

山崎 数学の山崎ですが、《舌よ歌え Pange lingua》の話を聞いてびっくりした。この聖歌は後の方の節で「それゆえ大いなる秘蹟をわれら請い願ひ Tantum ergo sacramentum veneremur cernui」と歌う極めて神聖な旋律ではないですか。それを世俗的なピアニストがそのような演奏をしたのには非常に驚いたが、何か理由があったのでしょうか。

金澤 この人はカトリック教徒であって、この旋律には特別な思い入れがあったらしい。彼の説明によれば、彼が心から敬愛していた教皇、故ヨハネス・パオロ2世に献呈して、哀悼の意を表したのだということです。

クリステワ まず、先生が久しぶりにICUに戻って来てくださったことに感謝し、これからも来ていただきたいと思います。先生のお話に関連して考えたことがある。ひとつの旋律に対して数多くの対応があり、表現が生

まれていくという過程はプロトタイプではなく、もっとユング的なアルキタイプと考えてはどうでしょうか。つまり心の構造そのものを、出発点のメロディーが近づけるものではないかと思った。そして「発展の可能性こそが人間なのだ」という先生の最後の言葉はとても心に響いた。それに関して、今日のお話とは少し違うが、以前からすごく気になっていたことがある。神戸大学の学生が言ったことだが、ヴィオラは「不完全な」楽器で、「完全」なヴァイオリンやチェロに比べると形も音の響きも欠点だらけなのだが、それがかえって魅力となって、日本ではヴィオラの演奏会が比較的多いという話を聞きました。辞世の曲をヴィオラで作った人も居るそうですが。

伊東 ブラームスですね。

クリステワ この話がとても気になっているのですが、不完全だからこそ、発展を目指す夢があるということか。

金澤 ただ、どうだろうか。完全なものなど、あるだろうか。

クリステワ 何か、形や寸法はヴァイオリンが素晴らしいといわれているのに対して、ヴィオラはすごく欠点だらけだそうですが。

金澤 私はそこまでは考えませんがね。ヴィオラにはヴィオラ独特の音色がある。特にブラームスなどは低い音が好きだったので、ヴィオラやチェロを盛んに使った。要するに使い方ですね。ただ確かに目立たない楽器であるが、決して劣っているわけではないように思うが、どうだろうか。

伊東 劣っているのではないですね。ヴィオラ独特の音域が持っている特殊性というか。人間はやはり高音と低音を良く聴く。メロディーとバスが

基本なのですね。真ん中に埋まっていると言っては失礼だが、間にある音については比較的意識を持たない傾向がある。

金澤 似たような例では、4声部の合唱でアルトとテナーがいつも尻拭い役で良いメロディーが少ないと言うけれど、私の専門のルネサンス時代では一番重要なメロディーはテナーが歌った、支え役だったということがある。

伊東 真ん中にあった。

金澤 「テナー」という言葉自体が「支える」という意味を持っていた。つまり大黒柱で、その上に付けたのでアルトとなり、下に付けたのでバスとなった。それら全体の上にさらにソプラノがある。良くなんて一番高くないのに「アルト (高い)」なのかと聞かれるが、実はテナーを中心に考えているからです。だからアルトにはアルトの役割がある。

伊東 有難うございました。皆さんお忙しい中、大勢来ていただいて本当に有難うございました。

Abstract

Why Does Music Exist?

Why does music exist? Different from other animals, the human beings have natural nature to think and to express themselves by various means. One of such means is the language, but if they cannot use the language, they try to express themselves by movements of their bodies, or by using colors, shapes or sounds. They also have natural nature to pursue and honor the beauty and therefore try to express themselves in a way that they believe the most beautiful expression. As a result they have produced the literature by means of language, the dance and the drama by movements of bodies, the fine arts by means of shapes and colors, and the music by means of sounds. These are essential elements to their lives.

One can perhaps define the music as “aesthetic expression by means of sounds,” but the problem is whether there is the general consensus of what is beautiful. What is considered beautiful by some people may be felt ugly by others. As a result there are a variety of musical expressions in the world and each nation has its own music. In Europe the musical tradition goes back to Christian chants, of which the oldest is singing of the psalms, the custom that Christianity inherited from Judaism. The most important of early Christian chants is the Roman chant, better known as Gregorian chant, which has become the starting point of later European music, both sacred and secular. As specific examples the speaker wishes here to demonstrate eight different reciting tones of Psalm 110 (or Psalm 109 in Latin), the Lutheran chorale “Christ lag in Todesbanden” and Bach’s cantata based on the chorale, and a performance of a popular pianist based on a Gregorian melody.

Les Tentations de Saint Antoine

CHRISTINE KODAMA

à mon père Maurice de Larroche

Introduction

Saint Antoine le Grand, anachorète égyptien, fondateur de l'érémisme chrétien et donc doyen des Pères du Désert, qui vécut de 251 à 356, a fasciné de nombreux artistes. Beaucoup de tableaux représentent le saint devant sa cabane de moine, en présence des démons venus le tenter, et Flaubert n'a cessé toute sa vie d'être hanté par ce personnage comme en témoignent une œuvre de jeunesse, *Smarh* (1839), et les trois versions de *La Tentation de Saint Antoine* (1849; 1859; 1874).

Il m'a paru intéressant de choisir à mon tour ce thème, dans le cadre de cette série de conférences de l'Institut pour l'étude du Christianisme et de la Culture (ICC) sur ce qui définit l'être humain.

- 1) Nous étudierons d'abord le thème de la tentation en cherchant à comprendre ce que les tentations ont pu représenter pour cet homme qui vécut aux troisième et quatrième siècles de notre ère.
- 2) Nous verrons ensuite en quoi consiste la tentation (au singulier) du personnage de Flaubert.
- 3) Enfin, nous nous interrogerons sur la signification que peut avoir pour nous, au XXI e siècle, le combat d'Antoine contre les démons.